



知覚と 思惟

川崎ゆきお

「今日は感覚や知覚と思惟の話をしましょう」

「カンカンと椎茸の話ですか」

「よくそこまで飛ぶのう。まあ、そう言うことなんだが」

「合っているのですか」

「で、カンカンって何ですか。感官のことですか」

「缶です。空き缶です」

「あ、そう、その缶ではなく、感覚、つまり目や耳などの感覚の話です」

「はい」

「思惟は、思い考えることです」

「最初からそう言えばいいのに。だから、カンカンと椎茸が来たのですよ」

「その連想こそが全てです」

「あ、はい。もう解答ですね。今日は有り難うございました」

「待たぬか。まだ話の下り、一番美味しいところを私は語っていない。これではカタルシスが足りない。あ、先に注意しておきますが、カタルと、語るを重ねないように」

「はい、語るに落ちたなんて言いません。腸カタルと本当は言いたかったのですが」

「既に言っておるではないか」

「早く結論の語りをお願いします」

「感覚や知覚と思惟は同じなんじゃ」

「先生、その椎茸はやめてください。感覚は分かりますが、思惟と重ねたとき、すぐに重なりません。思うでいいんじゃないですか。考えるでいいんじゃないですか。纏めて、思考じゃだめですか」

「そうじゃのう。わしも物の本で読んだことなので、そのときの言葉をついつい出してしまう。私は馴染んでおるが君は慣れない言葉なので、使いこなせないのだろう」

「そうです。でも人にものを教えるわけですから、分かりにくければ、主旨に反しますよ。何も伝えていないことになります」

「主旨はいいのかね」

「はい、主旨は分かります。よく使いますが、思惟は使いませんよ先生。これって、常識でしょ」

「そう言う感覚がそもそも考えなんだよ」

「はいっ？」

「感じたことと考えたこととは、殆ど同じなんじゃ」

「へー」

「分けて考えるからおかしくなる。そんなもの一緒にやっておるのです」

「じゃ、普通じゃないですか」

「ああ、そうかね」

「普通の話をして、さも何かあるように語るからいけないんですよ。紛らわしいです」

「そうかね」

「みんなが知っていることを、さも発見したように話すから、イライラするんですよ」

「ああ、そうかね」

「嫌いな人の話は、何を聞いても嫌いですし、いくらいいことを言っても、それは間違いのよう
に思えたりします」

「原始的な」

「基本はそうでしょ。好き嫌いって感覚でしょ。その中に全部入っているんですよ」

「そうなのです。それをわしは言っておるんだ」

「え、そうなんですか」

「人間は所詮観念の奴僕なんだ」

「一日一つでいいです。観念なんて、また次にしてください。そういうのを連発するから、さっ
き覚えたこと、すぐに忘れてしまうんです。もうカンニンしてください」

「じゃ、感覚や知覚と思惟、つまり、思い、考えることとは同じだけでいいか」

「はい。しかし、ごっちゃで普通でしょ。それ以外、何かありますか」

「君は、知覚と思惟は違うとなぜ言わない」

「え」

「そうでないと、その理由を説明する楽しさが、私にはないじゃないか。カタルシスがないじゃ
ないか。そして君は、それを聞き、ああそうだったのかと驚いた顔をして欲しかったんだ」

「はいはい、じゃ、次回から、授業料は先生が僕に払ってください。それなら、先生のリード通
り受け答えするサービスに心がけますから」

「ああ、もうよかろうて」

「コヨーテを連想してはだめですね」

「だめ」